
- Next -

Hrmary

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- Next -

【Nコード】

N3724P

【作者名】

Hrm ary

【あらすじ】

【更新情報】 4 / 26 e p i s o d e . 8 更新# # #

ここ数年、著しく犯罪が増加していた。そしてそれらの多くは不可解な様子を呈していた。そんな不可解な事件の裏には、Nextと呼ばれる、能力者たちの存在があった。

一方、高校生の水無月優真が生活をする星陵市でも、連続惨殺事

件が発生する。偶然か必然か、優真はNextをめぐる運命の渦に巻き込まれていく。能力者達と繰り広げる激闘の末、優真がたどり着いた真実とは……。

2011/4/5 連載開始。

episode 1

どこかの誰かは言っていた。

「空は一つに繋がっている」と。

そつだとするならば、

真上に広がるこの青空のように、

二つに別れた僕等の道も、

いずれ一つに、繋がるのだろうか……。

改札を出ると、茹だる様な陽射しが照りつける。周りでは会社へと急ぐサラリーマン達が、額に滲んだ汗をハンカチで拭いながら、足早に歩いている。

「いい天気だな。」

煌々と輝く太陽の光を掌で遮りながら、水無月優真は、眩しそつミナツキユウマに目を細めて空を見上げた。

頭上には、雲一つない青空が広がっている。既にかんりの気温だ

が、今日は一日暑くなりそうである。

「何じじくせえこと言っただよ。」

優真の独り言に対して、返事が返ってきた。その声に後ろを振り返ると、仙道健司センドウケンジが苦笑いを浮かべながら立っていた。

「いや・・・夏だな、と思っただよ。」

「当たり前だ。いまは7月だぞ。夏真っ盛りだ。おまけに今年は例年より3割増の暑さを絶賛提供中だとさ。」

健司は暑さを嫌がる様に、恨めしい目で太陽をちらつと見た。

切れ長の目に少し茶色がかった髪、中性的な印象を与える優真とは対照的に、アシンメトリーに伸ばした真っ黒の髪から覗く健司の目は大きく丸い。

「とりあえず行くか。」

健司がそう言うと、駅から続く生徒たちの流れにのって、二人は歩き出した。

二人が通うのは星稜北高校。この星稜市には星稜北高校の他に、駅を挟んでちょうど逆側にある星稜南高校、さらにいくつかの私立高校が存在する。

比較的都心から近いわりに、公園など緑が多い星稜市は、近年人気が上がっていた。それに伴い、駅前の開発も進んでおり、大型デパートや複合レジャー施設が立ち並ぶ。

星稜高校はそんな駅前繁华街を抜けた住宅地の奥にある。優真と健司は頬を流れ落ちる汗を拭いながら、学校へと向かった。

――

教室に入ると、半分ぐらいの生徒が既に登校しており、それぞれ朝の雑談を楽しんでいた。

優真と健司のクラスは1年C組。入学直後の席替えで優真が窓際が一番後ろ、健司がその前と、たまたま席が前後になり、意気投合して以来、いつも二人で行動している。

比較的キレイな顔立ちと、スラっとした出で立ちから二人とも女子生徒から密かに人気が高いが、社交的な健司とは対照的に、人によつては冷たく感じてしまう優真の雰囲気、入学してから半年たった今も、クラスメートですら、優真と話すのが憚れてしまうという、微妙な距離感を作っていた。

「今朝のニュース見たか？」

席に座ると、窓際に背を持たれかけて横向きに座った健司が話しかけてきた。

「……いや、見ていない。」

荷物を机の上に起きながら座った優真が答えた。

「また犠牲者だよ。今度は上半身が細切れにされていたらしい。下半身は無傷だったにもかかわらず、だ。」

健司が話しているのは、最近この星稜市で連続しておきている惨殺事件のことだ。

まだ7月が始まって1週間ほどだというのに、今月に入ってからもう既に3人が犠牲となっていた。

事件が始まった先月から数えると、計5人目の犠牲者となる。

「警察が調べたけど、あまりにも鮮やかな切れ口に、出血が全くない状態で、いまだ凶器すら特定できてないらしい。」

毎回死体は似たような状態で発見されるが、その度に細切れにされる場所が違っていた。

「やっぱりあれか、異能人？ってやつだったか。人間の中に人間じゃないやつが混じってんのかね。」

「はっ、あほらしい。そんな戯言信じてるのか？」

優真は健司の言葉を鼻で笑い飛ばし、窓から校庭を眺めた。

始業時間が近づいたため、歩いて行く生徒はまばらになっていた。

「どっかの週刊誌に書いてあったぜ。“特殊な能力を操る異能人現る”ってな。」

この連続殺人事件の殺害方法があまりにも現実離れしているため、週刊誌が面白がって様々な記事を書いていた。そして何の成果もあげられていない警察に対する批判も高まっていた。

「・・・漫画の読みすぎだ。」

「まっ、そりゃそうか。そんなやついたら、今頃日本は大騒ぎになつてゐるっつーの。」

欠伸混じりに健司がそう言ったと同時に、担任の教師が入ってきた。

「ホームルーム始めるぞ〜」

出欠簿を広げる教師を一瞥したあと、優真は再び窓から空を眺めた。

「“異能人“・・・ね。」

優真の心とは裏腹に、雲一つない青空が広がっていた。

episode・1 (後書き)

さて、いよいよ連載を開始しました。

拙い文章かと思いますが、物語の登場人物とともに成長していかれたらと思います。

温かい目で見守ってやってください。

episode・2

「おい、聞いたか!!」

ぼーっと考え事をしながら窓の外を眺めていた優真は、どこことなく弾んだ健司の声に教室を見渡した。

何時の間にかホームルームは終了し、教師も居なくなっている。

何時もならそのまま一限が始まるはずだが、何故か皆仲の良いグループで集まって、興奮気味に話している。

「悪い、全く聞いてなかった。」

「おまえな、はぁ・・・こんな一大ニュースを聞き逃すとは。」

健司は両手を広げて肩を竦め、わざとらしく落胆したジエスチャ―をした。

「一大ニュース？」

「ああ、今日転校生が来るんだとよ!しかも聞いて驚くなよ、なんと・・・」

「・・・女子か。」

「っ・・・そうだ。」

最後の決めセリフを言われてしまった健司は不満げな顔をしながら広げた両手を下げた。

「おまえのそのハイテンションぷりを見れば容易に想像がつくよ。」

「それでも言わないのが優しさってもんじゃないのか？」

拗ねたように健司が言う。

「そんな優しさは一片も持ち合わせてないな。」

優真は健司の言葉をばつさりと切り捨てた。そんな容赦ない優真に、健司はガクツと頂垂れる。

「優真……一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

「友情って……なんですか？」

「茶番だ。」

即答で出てきた身も蓋もない優真の言葉に、健司は引き攣った笑い浮かべた。

「ってもうそんなことはどうでもいい！とりあえず転校生が来るんだよ。」

「なるほど。で、いつ来るん……」

優真がそう言った瞬間、教室の扉が開き、担任の教師の後ろに続き、一人の女子生徒が入ってきた。それまでざわめき立っていた教

室が、一瞬にして静寂に包まれた。

「ほら、おまえら早く席に戻れ！」

教師のその言葉に、固まっていた生徒全員が慌てて席についた。

(これは、また・・・)

他のクラスメートほどのリアクションはとらなかったが、優真も内心驚いていた。

それほど高くない身長だが、短めのスカートから覗く白い足はスラッとして長い。ウエーブのかかった艶やかな黒髪は肩から背中へ伸びている。転校生は、意思の強そうな大きな目が印象的な美少女だった。

「当たり前だな。」

後ろを振り向いた健司が、小さな声で嬉しそうに呟いた。

「川島杏奈です。」

教師に促されて女子生徒がした自己紹介は、たった一言だった。

(ん・・・?)

その瞬間、気のせいか一瞬優真の背筋に寒気が走った。

女子生徒の余りにも簡潔な自己紹介に教室内がざわめき、教師が慌てふためく中、優真がふと前を見るとその女子生徒が優真を睨ん

だ気がした。

しかし転校生はすぐに何事もなかったかのように一礼すると、空いている席へと向かった。

何時もとは違つどこかぎこちない雰囲気の中、授業が開始された。

――

休み時間になると、転校生の杏奈はクラスメートに囲まれて質問攻めにあつていた。

「美少女の転校生なんざ、漫画みたいなことあるんだな。」

そんな人集りを遠巻きに見ながら、席に座つたままの健司が言った。

「そうだな。それにしてもこんな時期に転校生なんて珍しいな。もうあと何週間で夏休みだろ。普通は学期始まりで来るんじゃないのか？」

「お父さんの仕事の都合だつて。突然だったから、しょうがなかったみたいだよ。」

優真の質問に対する答えは、後ろから返ってきた。振り返ると、クラスメートの水澤ひとみが立っていた。

「何でそんなこと知つてんだ？」

健司がひとみに尋ねた。

「昨日、磯崎せんせの手伝いをしてる時に、転校生のこと聞いたの。」

ひとみのその言葉に、健司はあからさまに嫌そうな顔をした。

磯崎とは優真たちのクラスの担任で、科学を担当している教師である。髪をぼさっと伸ばし、黒縁の眼鏡をかけた、所謂オタクの風貌をしていたが、最近髪を切り、コンタクトにしたためか、ガラリと雰囲気が変わった。

もともと、面白い先生だったので、見た目もよくなったことから、最近では女子生徒からの人気が急上昇だ。

しかし女子を鼻屑する癖があり、男子生徒からの評価は低い。健司もその一人だ。

「おまえよくあいつの手伝いとか出来るな。どーせ科学資料室で資料整理でも手伝わされたんだろ？そのうちあのオタクに襲われるぜ。」

「あはは、磯崎せんせはオタクじゃないし、そんなことしないよ。」

健司の言葉は磯崎に対する嫌悪感が丸出だったが、ひとみは意に介さず笑い飛ばした。

「そつだよねえ、水無月くん。」

「そこでおれに同意を求められても困るが。」

唐突に話を振られたが、磯崎に対して特に何の感情も持っていない（興味がない）優真は戸惑い気味に答えた後、今だに質問攻めにあっている転校生の杏奈に何となく視線を向けた。

ちなみにひとみは、健司以外では唯一と喋っている、優真に対して臆せず話しかけるクラスメートだ。優真が特に何をした訳ではないが、他のクラスメートは萎縮してあまり会話をしようとしないうし、優真もそれでいいと思っていた。

クリクリとした目に肩までで切り揃えられた黒い髪のはとみは、身長が170cm後半の優真や健司と並ぶと肩までしかない。そんな小ささも相まって、一見すると小学生と見間違ふようなあどけなさを残す。

また、いつも笑顔で無邪気にはしゃいぐひとみは誰に対しても優しく、クラスのマスコットの存在となっていた。

「水無月くんも、川島さんみたいな子がタイプ？」

クラスメートに囲まれる杏奈に視線を向けていた優真に、ひとみが小首をかしげながら尋ねた。

「いや、そういう訳じゃない。まあ綺麗だとは思ってる。」

「おっ？優真にもとうとう春が来たか！？」

その言葉に、すぐに健司がくいついてきた。普段女の子に対しても冷たく、浮いた話が全くない優真のその発言は意外だったのだ。

「一般論だ。なんでもかんでも、そう結びつけるな。この年中発

情バカが。」

「……。」

「あはははっ！やっぱり水無月くんのツッコミは絶妙だね！」

厳しい言葉に泣きそうな顔で睨む健司と、よくわからないところでツボに入り大爆笑しているひとみを横目に、優真は再び杏奈のほうを見た。

先程の自己紹介の時とは打って変わった柔らかな微笑みを浮かべている杏奈は、クラスメートたちと談笑していた。

先程感じた悪寒が引つかかっていたが、楽しそうに話す杏奈からはそのような雰囲気は全く感じられない。

（気のせいか……）

優真はそう結論づけると、気を抜くように小さく息をはいた。

episode 3

時期外れの転校生という臨時イベントがあったものの、その後は
変わらない日常が続いていた。

しかし・・・

「不機嫌そうだな。」

校庭の端の芝生に座り込み昼食を食べていた健司は、残り一口と
なったカレーパンを口に放り込みながら言った。

「まあ、な。」

ここ数日、何時にも増して優真の口数が少なかった。

「視線を感じる？」

「ああ、学校でも学校外でも、なんていうか監視されてるような視
線を感じるんだよ。」

優真が不機嫌だった原因は、最近感じている妙な視線のせいだ。

「モテる男はつらいね。可愛い女の子からのストーカーですか。」

茶化すように健司が言った。

「笑い事じゃねえよ。それに女の子とは言ってない。」

優真は盛大に溜息をついた。

最初はほんのちよつとの違和感だった。それが日に日に強くなり、現在では明らかに監視されているような視線を感じるようになっていた。

「でも学校にいても感じるってことは、うちの学校の生徒だろ。注意してれば誰だかわかるんじゃないの？」

「まあ・・・そうなんだけどな。」

鋭い健司の発言に、優真は言葉に濁した。そして、健司に気付かれないよう小さくため息をつき、少し冷めてしまったコンビニ弁当をかきこんだ。

――

「ここ数日の事件に伴い、しばらくの期間部活動は自粛し、集団下校とする。放課後は寄り道せず、速やかに帰るように。」

終業のホームルームでの担任の磯崎のセリフに、教室中がブーイングに包まれた。

「文句をいうな。気持ちわかるが、実際に人が亡くなってるんだ。何かあってからじゃ遅いんだぞ。」

磯崎の話は至極正論で、みな不満げな顔を残しながらも、静かになつた。

「いよいよこんな事態になつたか。」

横向きに座っている健司が、優真のほうを向いて言った。

「当然といえば当然だな。むしろ対応としては遅かったんじゃないか。」

二ヶ月で5人も人が殺されているわけである。この位の対応はおかしい。

「サッカー部はどうするんだ？大会が近いんだろ？」

優真は健司に尋ねた。健司が所属するサッカー部は夏休みに県大会を控えていた。いまは大会に向けて最後の追い込みをしているところである。

「わかんねーな。今日部活でミーティングがあるから、そこでなんか言われるだろ。」

「そうか。気をつけて帰れよ。」

「ああ、マネージャーだけは守らないとな。しっかり送って帰るよ。」

その言葉に優真はサッカー部のマネージャーの顔を思い出そうとした。確か同じ一年生で、可愛い女の子だった。その子のおかげで、今年は新入部員が多く入ったとか。

「それだと逆に、そのマネージャーの貞操が心配だな。」

「……なあ、なんか優真に悪いことしたか？」

優真の容赦ないツッコミに、健司はガクツと頂垂れた。

――

(またか・・・)

放課後、帰り道で例の視線を感じた。

健司は予定通りサッカー部のミーティングに参加しており、そんなに仲が良くないクラスメイトたちと帰る気にもなれなかったので、集団下校の輪から外れて、優真は一人で帰っている。

(家までついて来るんじゃないよな・・・)

どこにいるか正確にはわからないが、明らかに尾行されている気配があった。

昔、“とある人”に古武術のようなものを習っていたため、優真は気配に対して敏感だった。

さりげなく後ろを振り返る。

学校から駅に向かう生徒たち、犬の散歩をしているおばさん、子連れのお姉さん。住宅街の一角の風景は、いつもと変わらないものだった。

すうと息を吸うと、突然優真は走り出した。

住宅の間の狭い路地を抜け、右へ左へと駆け抜ける。

優真は足には自信があった。人の間をすり抜けながら、かなりのスピードで街を疾走する。しかしそれにも関わらず、優真を追いかけるように視線はつきまとうてきた。

それどころか、今までの探る様な視線から、殺気が籠った、突き刺さる様な視線へと変わっていた。

（振り切れないか。この展開は良くないな・・・）

夕方とはいえ、夏真つ盛りはこの季節では辺りはまだまだ明るい。いきなり物騒なことは起こらないだろうと高を括っていたが、優真に突き刺さる視線は、そのような甘い考えを払拭させるようなものだった。

住宅街から雑木林を抜ける。いつまでたっても纏わり付いてくる視線に振り切ることを諦めた優真は、真向から対峙することにした。

しばらくして雑木林を抜けると、開けた空き地にたどり着いた。

住宅街からちょっと離れた、裏山のような小さな高台にある、広い空き地だ。

そこは雑草が生え散らかり、普段あまり人が足を踏み入れない場所であることを証明していた。

「さて、と・・・」

優真は空き地の真ん中で立ち止まると、振り返り雑木林の奥へと声をかけた。

「そろそろ出てこいよ。探し合いはやめよう。」

優真のその言葉に、林の中から人影が現れた。

その人影の正体は、美少女転校生、川島杏奈だった。

episode 3 (後書き)

次回投稿予定：4/10(日)

(早まる可能性あり)

雑木林の中から、転校生の川島杏奈がゆっくりと姿を表した。

「いつから気付いてたの？」

杏奈はそう言いながら優真に近づくと、10m程の距離をあけて立ち止まった。

「いつからと言われれば、そうだな、最初からだよ。」

「・・・そう。流石ね。」

優真の言葉に大して驚いた様子もなく、杏奈は肩にかかった髪を手で後ろへかきあげた。

そんな何でもない仕草に、ちょっとした色気を感じる。美少女は役得だな、と優真はこの場の空気にそぐわない呑気なことを考えていた。

「で、用件はなんだ？ここまで熱烈な待遇を受ける理由が見当たらないんだが。」

その言葉に杏奈は少しだけ目を見開き、驚いた表情を浮かべた。

「この期に及んで、まだ惚けるとはね。意外だね。」

そう言うと、怒りを含んだ目で優真を睨んだ。二人の間に、えもいわれぬ緊張感が漂う。

暫しの沈黙を破ったのは杏奈だった。

「まあいいわ。言葉で問い詰めるより……こっちのほうが早い！」

杏奈は叫ぶと同時に右脚で地を蹴り、制服のスカートを翻しながら一気に優真との間合いを詰めた。

「氷時雨！！」

突き出した杏奈の左手から幾つもの小さな氷の粒が一つの帯となり、優真へ向かって飛来した。

「っ、問答無用かよ！」

優真は舌打ちすると転がるように右へ回避し、すぐに体制を立て直そうとした。

「はあっっ！！」

しかしその行動を予想していた杏奈の蹴りが、屈んだ態勢のままの優真へと襲いかかった。

腕をクロスしてその攻撃を辛うじて防御した優真は、すぐに立ち上がり、後ろへ飛ぶようにして杏奈との間合いを離れた。

「ちょっと待て！何がなんだか訳がわからない！なぜあんと戦わなければならんだ！？」

殺気立っている杏奈を落ち着かせようと、優真は叫ぶ。

「何故？まだ愚問ね！！」

再び氷の粒が、杏奈の周りに集まりだした。先程よりも数が多い。

「聞く耳なしかッ！」

優真は右側へと走り出した。丁度杏奈を中心にして円を書くように走る。杏奈の氷弾に狙い撃ちされないためだ。

「はあっ！！」

掛け声とともに杏奈が左手を前に振ると、氷の粒が一斉に優真へと襲いかかった。

優真は走りながら落ちていた木の棒を素早く拾うと、自分に向かってくる氷の粒に投げつけた。しかし、いとも簡単に棒は粉々になり、氷弾はそのまま優真へと向かってくる。

（やっぱり駄目か。くそっ！どうする！？）

寸での所で前に飛んで何とか攻撃を躲す。優真には、氷弾を退ける術がなかった。

追撃に備えて直ぐに体制を整えるが、杏奈はそれ以上の追撃をしてこなかった。

「何故、能力を使わないの？このまま何もしないでやられるつもり？」

「言っただろ、あんたと戦う理由がない。それに能力って何の話だ？あんたのその氷のことか。」

そう答える優真は小さく肩で息をしていた。辛うじてダメージは負っていないものの、体力を少しずつ削られている。長期戦になれば、いずれやられてしまうだろう。

「どこまで惚けるつもりか知らないけど、全部わかってるのよ。まだそんなことを言ってるなら、いいわ。教えてあげる。」

優真は突然現れた自分を突き刺すような殺気に慌てて周りをみた。何時の間にか、優真の周りを無数の氷の粒が取り囲んでいた。

「私と戦う理由、それは・・・貴方が人を殺めたからよ!!」

「っ!!!」

杏奈のその言葉と共に、氷の粒が一斉に優真へと襲いかかり、轟音とともに土煙が舞い上がった。

――

全方位の氷時雨に逃げ場はない。杏奈の攻撃に反応ができなかったのか、優真は避ける素振りを見せなかった。

「これで終わればいいんだけど・・・」

杏奈は土煙の奥から優真の気配を探った。

まだ暑さの残る夕方の夏風に吹かれて、次第に土煙が晴れてきた。

土煙が晴れたその場所は、氷時雨によって幾つもの穴が作られており、その威力の高さを物語っていた。

しかし、肝心の優真の姿はそこに無かった。

「えっ!?!」

その光景に驚いた瞬間、杏奈は後ろから強烈な殺気を感じた。

「・・・動くな。」

耳元で呟かれたその言葉に、杏奈は背筋に冷たい汗が流れるのを感じた。

絶妙なタイミングで飛来した氷時雨が着弾したはずの優真は、何時の間にか杏奈のすぐ後ろにいた。

そして、杏奈の背中には何か突き立てられていた。見ることはできないが、恐らく刃物の様なものだろう。

「・・・やっぱり、あなただったのね。」

「おまえは、何者だ?」

杏奈の問いには答えず、優真は質問をかぶせた。

恐ろしく冷たい声に、杏奈はたじろぎそうになるが、自分自身を叱咤して奮い立たせると、震えそうになる声で喋り出す。

「私は政府直属組織、特殊犯罪対策チーム、
”GRANT”（グラント）の一員よ。」

「GRANT？」

一瞬困惑した優真の雰囲気には杏奈はチャンスを感じ取った。

「氷時雨！」

杏奈はそんな優真の間をついて一瞬で頭上に氷の粒を発現させ、
自分と優真の間に放った。

そして前方に飛び、間合いをとる。すぐさま振り返り優真を見る
が、こちらに襲ってくる素振りも見せず、ただ立って杏奈を見てい
た。

「ふう・・・」

一先ず危機が去ったことに安堵し小さく息をつく。そして気を入
れ直し、再び優真を睨んだ。

「水無月優真、あなたを・・・連続殺人事件の犯人として逮捕しま
す。」

episode 5

「水無月優真、あなたを・・・連続殺人事件の犯人として逮捕します。」

杏奈の言葉に、優真は困惑した表情を浮かべた。

「・・・ちよつと待て、何か勘違いをしてないか？」

「しらばっくれても無駄よ。その殺気に、私の氷時雨を防いだ能力。それが何よりの証拠。どうやって氷時雨を防いだかはわからないけど、あなたは刃物を発現させるタイプの能力者ね。」

先程背後を取られたときに背中に突きつけられたものが、恐らく今回の事件の凶器となった刃物だろう。

隙を見て脱出し、間合いをとって振り向いたときには既に持つて居なかったところを見ると、自在に出したり消したりすることができるタイプに違いない。

「はぁ・・・」

杏奈の言葉に、優真が大きなため息をついた。それとともに、さつきまで杏奈に向けられていた凍りつくような殺気が、一瞬にして消え去った。

「まさかとんだ勘違いとはな。」

「勘違い？あなたの能力は刃物じゃないの？」

杏奈は突然なくなった殺気と優真の言葉が理解できなかった。

――

優真は杏奈に向けていた警戒を解いた。”人を殺めた”というキーワードに反応してしまったが、どうやらお互いの勘違いらしい。

「一回落ち着いて話をさせてくれ。」

優真の勘違いは解けたが、杏奈は依然として優真のことを、最近起きている連続殺人事件の犯人と思い込んでいるようだ。

まずはその誤解を解かなければならない。

「まず初めに、おれはあんたが言う様な”能力者”じゃない。」

その言葉に、杏奈は一瞬驚いた表情を浮かべたが、すぐに警戒した視線を優真に向けた。

「そんな言葉に騙されないわ。能力者じゃないなら、一体どうやって私の氷時雨を防いだの？」

「人より反射神経はいいんでね。それに運動神経にも自信がある。ただ避けたただけだ。」

優真は肩をすくめて言った。

「ふざけないで。」

「ふざけているつもりはないんだがな。じゃあ逆に聞くが、何故おれが犯人だと思う？何か証拠があるのか？」

このままでは埒があかないと思った優真は、杏奈に質問をした。

「私達の捜査で、今回の事件も犯人が何らかの能力者であることが判明したわ。能力者が操る力にはある特殊な波動があるのよ。犯行現場から、その名残りが感じられたわ。」

そう答える杏奈の左手は硬く握られ、殺気のような波動を放っている。優真がおかしな素振りを見せたときに瞬時に対応できるよう、能力を発動する準備をしているのだろう。

この殺気に似た波動が、杏奈が話す、能力に存在する波動なのだろうと、優真は考えた。

「なるほど、それで？」

「能力者を見つけるときはこの波動を頼りにする。能力者同士なら、お互いにその波動を感じることができるよう。そして潜入捜査としてこの街に派遣され、転校初日に自己紹介をしたときに、ふと思いついて微弱な能力の波動を放ってみたわ。そのときに反応したのが・・・」

「おれだった、ということか。」

杏奈が転校してきたときを思い出す。確かに杏奈からは小さな違和感を感じ、そしてそのときに杏奈と目があつた。

まさかそんなことで間違えられているとは、と優真は苦笑した。

「それで貴方を怪しいと思って、毎日監視したわ。そして、それ以来事件も発生していない。」

「なるほど。」

杏奈の話を一通り聞き終えると、優真は核心をつく問いを投げかけた。

「じゃあ一つ聞くが・・・いまおれから、その能力者の波動ってやつは感じるのか？」

――

優真の言葉につられて、杏奈は波動を探ってみる。

すると、さつきまでは戦闘に夢中になっていたため気付かなかつたが、優真から能力の波動が感じられない。

能力の波動は、基本的には能力が発動したときに放たれる。しかし、微弱な波動は隠しきれないものであり、この位の至近距離なら集中をすれば探知することができるはずだ。

しかし、優真からは全く波動を感じない。

「あなた・・・本当に・・・？」

「言っただろ？能力者じゃないって。」

優真は当然、といった顔をしている。

「でも・・・でも、じゃあなんで私の能力を見ても驚かないの？普通の人はこの異常な力に驚くはずだわ！！」

予想外の展開に杏奈は混乱していた。杏奈の能力を見ても全く動じず、すぐに対応していた。こういった能力を知らない一般人ではそうはいかない。

納得のいかない杏奈の声は、自然と大きくなってしまふ。

「・・・昔馴染みが、あんたと同じような、能力者だったからな。」

一瞬優真の表情が淋しそうに陰った。しかしそれは一瞬のことで、すぐに何でも無かったように言葉を続けた。

「それに今回の殺人事件だって毎日発生してたわけじゃない。あんたがおれを監視しだしてから事件が起きていないのだって、偶然じゃないのか？」

そう言われると、優真の言葉が至極正論のように聞こえてくる。

確かに優真が犯人である確証は何一つなく、転校初日の優真の反応と、自分のカンのみが頼りである。

「・・・」

反論する言葉が見つからず、杏奈は黙ってしまった。とうとう言い負かされてしまった杏奈は、悔しげに優真を睨みつける。

「これでわかっただろ？全部あんたのはやとちりだよ。」

優真は苦笑しながら、制服のズボンについた土を払う。その様子を見ながら、まだ納得がいかない杏奈は、再び優真に質問した。

「でも、あなたは一体何者なの？私の尾行にもすぐに気付いていたし、今日だって私の能力にも引かずに戦っていたし！」

氷時雨に全くひるまずに向かってきて、挙句杏奈の背後をとった。その力は只者ではない。能力者でないというなら、尚のことである。

杏奈の質問に、優真は少し考える素振りをしてから答えた。

「昔、鍛えられたんでね。」

苦々しい笑みを浮かべながらそういった優真はさらに続けた。

「それだけだよ。何者かと聞かれれば・・・ただの高校生だ。あんなのクラスメートのな。」

そういつて悪戯っ子のような笑顔を浮かべた優真の顔は、沈みかけの夕陽に照らされとても綺麗で、杏奈は一瞬見とれてしまった。

episode 6

「さて、説明してもらおうか。」

優真と杏奈は学校の屋上にきていた。

昼休みには屋上も開放されるため、天気の良い日はここで昼食を取る生徒も少なくない。今日も昨日に引き続き天気が良く、昼食を取りながら雑談する生徒が至る所に座っていた。

昨日の戦闘の後、優真の説明によって誤解が解けた二人は、翌日に杏奈が詳しい話をすることを約束し一旦別れた。派手に戦闘していたため、誰かがくる可能性が否定できないからだ。

二人は屋上にある貯水タンクの裏側へと移動した。ここは人があまり来ないため、落ち着いて話ができる。

「GRANTとは一体何だ？なんであんなみみたいな高校生が、そんなものに所属しているんだ？」

「……」

一般人に話せる内容ではないので話したくない。しかし、話さなければいけない。そんな状況に、杏奈は膨れ顔で優真を睨みながら、昨日の別れ際を思い返した。

――

空き地での戦闘の後、帰り支度をしていた優真が、振り返って杏

奈に告げた。

「明日、洗いざらい説明してもらおうからな。」

「説明つて、何をよ。」

一瞬優真の笑顔に見とれてしまった杏奈は、動揺を隠すように不機嫌な顔で尋ねる。

「全部だよ。あんたが何者で、あんたが所属するGRANTっていうのが何か。あんたの能力や”能力者”とは何か。そして今・・・この街で何が起きているか。」

「それは、一般人には話せないわ。」

杏奈は即答で拒否を示した。すると優真は飽きたように下を向いて溜息をはいた。

「やっと一般人と認めてくれたのは嬉しいが、もう部外者ではない。あんたの能力をこの目で見てしまっているからな。」

そう一方的に答えると、優真は雑木林の中へと歩きだした。

「ちょ、ちょっと！それはそうかもしれないけど、この話は国家機密よ！！簡単に話せないわ。」

そんな優真を杏奈は慌てて引きとめようとするが、優真再度振り返り、言い放った。

「今日あったこと、あんたの能力や、おれを犯人と間違えて襲撃し

たこと。それを誰かに話されたら困るだろ？」

悪びれた様子もなくしれっと脅迫する優真に、杏奈は絶句した。

「……そのセリフは悪党のセリフよ。」

「悪党で結構。じゃあ、明日昼休みに屋上で。」

そう言い残すと、今度こそ優真は雑木林の中へ消えていった。

杏奈は暫くの間呆然と、優真が去った後を眺めていた。

――

「よっぽどバラされたいみたいだな。」

一向に話し出さない杏奈に痺れを切らし、優真は再度催促した。

「わかったわよ。」

昨日のことを回想していた杏奈は、改めて腹がたってきたが、優真に急かされて渋々説明を始めた。

「“GRANT”は、日本政府の直属組織で、特殊犯罪対策チームとして設立されたわ。」

“GRANT”（グラント）とは、近年増加傾向にある、異常犯罪対策組織として、日本政府政府により極秘裏に設立された組織に
である。通常の警察では対象できないような事件を担当する。

「今回の事件が、それにあたるということか。」

「ええ、そうよ。もう既に何件も事件が発生してしまっているけど、今だに犯行の手口や凶器すら不明のまま。途方に暮れた警察から、私達に捜査依頼があったわ。」

このままではまた新たな犠牲者が出てしまう。これ以上の被害拡大を防ぐために、GRANTのメンバーである杏奈がこの街に派遣された。

「でも、高校生の私が学校も通わずにうるちよろしていたら怪しまれるし。それに意外かもしれないけど、学校っていう場所は、その街の情報が集まりやすい場所なの。噂話に敏感な年頃の子達が集まる場所だから。」

なるほど、と優真は妙に納得した。確かに高校生は噂話が好きな上に、色々なことに敏感である。また、親の話していることも話題に上がったたりするので、時として意外な情報が入手できるのだろう。

「そこからは昨日話した通りよ。私の波動に反応したあなたを、犯人だと思い込んだじゃったわけ。」

杏奈は時折吹き抜ける風に揺れるスカートの裾を抑えながら、そう話した。

「なるほど、概ね理解した。だが、今の話は核心ではないはずだ。“能力者”という、重要なキーワードが抜けている。」

優真は昨日の杏奈の能力を思い返しながら、話を続けた。

「昨日、今回の事件現場から能力者の波動を感じたと言っていたな。GRANTのメンバーであるあんたが派遣されたのは、こつちがメインの理由なんじゃないのか？」

優真の言葉に、杏奈は驚いた表情を浮かべた。しかしそんな杏奈の様子を気にせず、優真はさらに言葉を続ける。

「GRANTは特殊犯罪対策の組織と言っているが、本当は能力者対策の組織だな？」

杏奈は黙ったまま、優真を見ている。

「もっと言えば、今回の事件についても、ある程度まで犯人と絞り込んでいるはずだ。そうだな、恐らく……」

優真は一旦言葉を切ると、真っ直ぐ杏奈を見据えた。

「この学校、星稜北高校の生徒に、今回の事件の犯人がいる。そうだな？」

優真は確認の為に、最後は疑問形としたが、ほぼ間違いないと確信していた。

episode・6(後書き)

さてさて、ようやく6話までできました。現時点ではまだまだ謎に包まれている状況ですが、これからどんどん進展していきます。

引き続き、「Next」を御鼻頂ください。

優真は、最近起きている惨殺事件の犯人が、星稜北高校の生徒であるというところまで捜査が及んでいるのではと推測していた。

優真の余りにも断定的な言葉に、杏奈は驚きを隠せないでいた。

「何故、そう思うの？」

「そんなに難しい話じゃない。一つ目は、あんたが派遣されたのがこの高校だったからだ。」

優真は貯水タンクにかかる梯子に腰を掛けた。杏奈は先程までと変わらず、もう一個の貯水タンクにもたれかかっている。

「高校が情報の集まる場所だから、という話があったな。それも一つの理由だろうが、単純に多くの情報を集めるなら、ここよりも生徒数が多い星稜南高校に行くはずだ。」

「それは、たまたまかもしれないじゃない。」

たまに吹き抜ける風に靡く髪を、鬱陶しそうに払いながら、杏奈が否定した。

「たまたまかもしれない。でも、あんたが言ったようにGRANTという組織が政府直属の、おれみたいな一般人に知られたくないような国家機密の組織なら、たまたまで動く可能性はひくい。おれが推測した通り、能力者対策の組織なら尚更だ。」

「……………」

今度は反論する言葉がないのか、杏奈は黙ったままである。

「二つ目の理由は、あんたが教室で能力の波動つてやつを放ったことだ。あんたはふと気が向いてやってみた、と言っていたが、これも一つ目の理由と同様に、こんな重要なことをたまたまやるとは思えない。そしてそれに反応したおれを、あんたが犯人と”決めて”いたこと、これが三つ目の理由。」

優真は一度、言葉を切った。昼休みに終わりに近づき生徒たちが教室に戻り始めたのか、校庭から聞こえてくる声が次第になくなってきた。

杏奈が何も言ってこないのを確認すると、優真は再び話始めた。

「更に言うならば、今だにあんたがおれのことを犯人だと思っているのも大きな理由だ……いや、正確に言っと”あんたら”かな。」

優真の言葉に、杏奈は今までで一番の驚いた表情を見せた。

「なあ、そのあんた。」

優真は足元を見つめたまま、腰掛けている貯水タンクの上に声をかけた。

「参ったね。そこまで気づかれてるとは。」

優真の頭上から若い男の声が出た。そして貯水タンクの上から、人影が現れた。

シルバーのスーツをキチツと着こなした男だ。年齢は30代前半だろうか。一見すると、一流企業に勤めるサラリーマンのようだ。

しかし男がまとう雰囲気はただのサラリーマンのそれではなく、底しれない何かを感じさせる。

男は軽い身のこなしで、タンクの上から飛び降りてきた。

「ちょっと！これは私の任務のはずよ！なんであなたがここにいるのよ！」

突如現れた男に杏奈が抗議した。

「誰かさんが一般人にやられそうになってるから、フォローしに来たんだよ。」

「やられそうって、やられてないわよ！！！」

「しかし本当に君は何者なんだか、興味が尽きないね。」

杏奈に対して答えず、男は優真を見定める様に見た。

「ただの高校生だが・・・それは褒め言葉だと捉えておくよ。」

「それで構わない。しかし、あまり無闇に首を突っ込むのは感心しないね。」

「首を突っ込ませたのは、あんたらのほうだと思うが？」

棘のある言葉の応酬に参加できない杏奈は、ハラハラしながら二人のやりとりを見ていた。

スーツの男は、優真の目を見据えた。それに対して優真は目を逸らさず、真っ向から向き合う。

数秒の沈黙の後、男は静かに口を開いた。

「まあ、こちらから巻き込んだというのは確かに一理ある。」

その言葉は杏奈はバツの悪そうな顔をしてそっぽを向いた。

そんな杏奈の様子に男は苦笑いしながら言葉を続ける。

「しかし、君が言葉の通りだだの高校生というならば、これ以上は関わらないことを進めるよ。私はそのことに釘をさしに来ただけだ。」

男はそう言うと、屋上の出口へと向かって歩いていく。

「おい！」

優真は男の背中へ声をかけた。

「一つだけ答える。」

その言葉に、男は背を向けたまま歩みを止めた。

「“能力者”とは一体なんなんだ？この街でいま、何が起きてる！？」

男は扉の前で立ち止まり、少し考えるそぶりを見せた。

「質問が二つになっているが・・・そうだな。二つの質問も答えとしては一つだ。」

屋上の扉のドアノブに手をかえて振り返った男が言った。

「わからない」だ。」

ガチャっという音と共に、男は扉の向こうへと姿を消した。

授業が始まり誰もいなくなった屋上は沈黙が支配し、ただ校庭から体育の授業の音が聞こえてくるだけだった。

「こっちだ！こっちにボールを回せ！！」

校庭からは元気のいい声が聞こえてくる。男子の体育はサッカーのようだ。

女子の体育は体育館でのバレーで、今は試合の時間に入っている。休憩中の杏奈は開け放った体育館の入り口に腰掛け、校庭の男子のサッカーを見ながら、一昨日のことを思い出した。

――

男が屋上から去ったあと、優真はしばらく扉を見つめていた。

杏奈は何と声をかけたらよいかわからず、かといって重々しい沈黙が漂うこの場から黙って去るのも憚られた。

（あいつ、フォローしにきたっていったけど、全然フォローなんてないじゃない！どうするのよ、この重い空気！！）

杏奈は散々空気を重たくして去っていったスーツの男に、心の中で悪態をついた。どうやってこの場を収めようか考えあぐねていたが、その状況を打開したのは意外にも優真だった。

「さてと、行くか。」

「行くなって、どこへ行くのよ。」

突然の優真のセリフに杏奈は困惑した。一方の優真は、まるで何もなかったような顔をしている。

「どこって、もちろん授業だよ。もう5限が始まってるしな。これでも割と優等生だったんだがな。」

そういうと屋上の出口へと向かって優真は歩き出した。そんな優真の後ろ姿を眺めていた杏奈は、なんとなくもやもやとした気持ちを抱えていた。

「ねえ！」

気が付いたら思わず優真を呼びとめていた。

「・・・聞かないの？」

その言葉に優真は驚いた顔をしている。

「知りたいんでしょう？あたしたちのこととか、”能力者”のこととか。」

「まあ・・・知りたいのは知りたいが。」

釈然としない返答に、杏奈はさらに食いついてしまう。

「じゃあ・・・じゃあ、なんで聞かないの!？」

優真は”能力者”のことやGRANTのこと、今起きている事件のことを知っていたが、そのために態々杏奈と相対して闘ったのだ。そして今日、さっきまではそのことを問い詰められていたは

ずなのに、今の優真からはその気配が感じられなかった。

その豹変ぶりに、杏奈は混乱していた。

「そうだな・・・。あんたの仲間が言っただだろ？」わからない”つて。恐らくそれが真実なんだと思う。だから、今更あんたに問い詰めたところで、おれの知りたいことはでてこないだろうしな。」

「あなたの知りたいことって、何？」

「それは・・・」

...

あの後結局、優真は何も語らずに屋上を去って行った。気のせいかもしれないが、その時の優真の顔は、とても寂しそうに見えた。

(一体、何なんだろう？何を隠してるんだろう？)

気づけば、杏奈は優真のことを目で追っていた。サッカーでグラウンドを走り回っている姿を眺めていると、明らかに周りとは違う動きをしている。その様子から、やはり運動神経はいいのだろうと感じた。ボールを持つと、周りの生徒を置き去りにしてドリブルで突き進んでいる。

「気になる男子でもいるの？」

「へえああ!!」

自分の思考の世界に入り込んでいた杏奈は、急に声をかけられた

ことに驚きすぎて変な声をあげてしまった。

「え、えっと・・・水澤さん？」

「うん、よく覚えててくれたね！ひとみでいいよ！あたしも杏奈ぢやんって呼んでいい？」

この学校に転向してからまだ一週間ほどしかたっていない杏奈だが、屈託のない笑顔で話しかけるひとみに、杏奈は好感が持てた。

「いいわよ。あたしもひとみって呼ばせてもらっね。」

「で、誰を見てたの？」

ひとみは杏奈の横に腰をかけると、意地悪な声で問いかけ、杏奈の脇腹をつつく。

「ちよっ、ちよっと！そんなんじゃないわよ！！」

何故かムキになって慌てて否定するが、その姿が逆にかえって怪しく見えてしまう。

「ん〜すごい慌てようだね。さては凶星か〜？」

「だ〜か〜ら〜!!」

そういいながら戯れる姿はとても微笑ましく、美女二人のそんな姿に、校庭にいた何人かの生徒は目を奪われていた。

— — —

「やっぱおまえはサッカー部に入るべきだつて!!」

放課後、校門へと向かう間、優真は健司の猛烈な勧誘を受けていた。

体育のサッカーで別のチームとなった優真と健司は何度となく直接対決をむかえた。サッカー部で期待のホープとして騒がれている健司と引けをとらない動きを見せた優真は2得点を決め、チームとしては3 - 1で見事勝利した。

「部活動にはあまり興味がないな。」

「もつたいねーな。その運動神経は宝の持ち腐れだよ？まあ、部活動で使わないんなら・・・こういうときに役立ててみようか？」

そういった健司の視線の先には、明らかに友好的とは言えない上級生3人組がいた。

「水無月優真だな。ちょっとツラかしてもらおうか。」

近づいてきた上級生の一人が、優真を睨みつけながら言った。ダボダボにはいた学ランのズボンに大げさなまでに開け放ったワイシヤツのボタン、あまり綺麗に染まっていない茶髪に、耳には大きなピアス。3人とも似通っていたが、所謂典型的な不良の格好をしていた。

「先輩、おれは仲間外れですか？いじけちゃうな。」

こんな状況にも関わらず、健司がおどけた調子で言った。

「てめえ！」

「よセツ！ここでは目立つ。いいだろう、おまえもついてこい。」

健司に掴みかかろうとした一人を制止し、最初に声をかけた上級生があごでこっちへこいとジェスチャーすると、正門とは逆の方向へ歩き出した。優真と健司がその後続き、その後ろから他の上級生二人が続く。恐らく逃げないように後ろから見張っているのだろう。

向かった先は、校舎の裏手にある今は使われていない旧体育館だった。新しい体育館ができてからこの場所は使われておらず、普段は不良生徒のたまり場と化していた。そのため、来月には取り壊される予定である。

「で、何の用ですか？」

旧体育館へ入った後、優真が上級生の一人に尋ねた。普段使われていないだけあって、少し埃っぽい空気だ。

「最近調子のってるらしいじゃねーか。ちょっと世間を勉強させてやるっかと思っただな。」

そういうと、ニヤリと笑みをこぼした。

「それは是非とも勉強させていたくださいですね。」

「な・・・やろう、やっちなまえ！！！！」

上級生の挑発に優真が嫌味で返した瞬間、上級生たちが一斉に殴りかかってきた。

優馬の左側にいた上級生が、右手で顔を狙ってくる。優真はそのパンチを左手ではたき、一気につめよろうとした。

「くっ！」

しかし、はたこうとした左手ごとパンチを押し込まれ、逆に吹き飛ばされた。

(何だ？この力は!!?)

すぐに起き上がるも、もろにパンチを食らった左手はジンジンとしびれている。

「ぐうああああ!!！」

その声に目を向けると、同じように健司が飛ばされ、腹部を押さえて床に転がっていた。

「健司!!！」

「人の心配してる場合かよ!!！」

もう一人の上級生が鉄パイプを振りかぶり、一直線に優真へと振り下ろした。辛うじて横へ転がって回避するも、目の前にはすぐに蹴り足が迫っていた。

「くっ!!！」

両手を顔の前で交差して蹴りを防御する。想像以上の威力に後ろへ吹き飛ばされ、優真は反対側の壁に激突した。

「はっはっは！最高だぜこの力！」

上級生3人は大声をあげて笑っている。その笑い声には狂気が含まれていた。

(どういうことだ！？この力は異常だ！)

しびれた両手と打ちつけた背中を気にしながら、優真は鉄パイプで殴りかかってきた上級生の足元を見る。体育館の床には鉄パイプを振り下ろされた衝撃によって穴があき、その力の異常さを示していた。

小さく深呼吸をして痛みをこらえる。健司を見やると、一撃で力尽きたのか床にうづくまつたまま動かない。

(このままではまずいな)

優真は立ち上がると、両手をだらりとさげて体の力を抜き、集中を始めた。お腹のあたり、丹田に力を込めて体内のエネルギーを活性化させる。そしてそのエネルギーを全身に循環させるイメージを作る。すると、温水が体に広がるような感覚の後、腕や背中に感じていた痛みが瞬く間に消えていく。

「ん？なんだ？」

それまで一方的な暴力に酔っていた上級生が、優真の異変に気付

いた。

「ここまでやったんだ。後悔するなよ。」

優真はそう言つと、上級生たちを睨みつけた。

episode・8 (後書き)

なかなか話が進まない・・・ような気もしますが、この一連の騒動もあと2話くらいで終わる予定です。

今後ともよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3724p/>

- Next -

2011年10月8日10時54分発行